



HIROSAKI
UNIVERSITY

第15回 弘前大学 震災研究交流会

弘前大学のネットワークで震災研究を広げよう。

被災地のために、弘前大学のできることを。

日時 2012年12月11日(火) 18:00~20:00

場所 コラボ弘大8F 八甲田ホール

司会 上平好弘

弘前大学 地域共同研究センター
産学官連携コーディネーター

18:05 ~

「除染研究の現状から見えてきた汚染農用地再生の可能性」

姜 東鎮

弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター 准教授

18:55 ~

「放射線科学的手法による福島県浪江町復興支援活動」

床次 真司

弘前大学被ばく医療総合研究所 教授

19:45 ~

意見・情報交換

※ 震災対応や震災研究に興味のある方はどなたでも参加・聴講できます。

※ 当日、報告の後に、震災に関する情報・意見交換を行います。情報をお持ちの方はこの機会にご紹介ください。

※ 連絡会終了後、有志の懇親会を予定しています。

第14回震災研究交流会は2012年11月1日、初の「書評」、さらには著者からのリプライという形式で行われた。著者は、津軽で社会学者として成長した山下祐介・首都大学准教授。評者は、津軽での人生が緒に就いた社会学者、平井太郎・弘大地域社会研究科准教授。東日本大震災を挟み、津軽ですれ違った2人は、なぜか微妙な緊張感を漂わせながら対峙した。

○「『辺境』からはじまる—東京／東北論」(明石書店、赤坂憲雄・小熊英二編著、山下祐介ら執筆) 紹介

—白石睦弥・弘大特別研究員

○書評「東京の震災論／東北の震災論」—平井太郎准教授

○著者からのリプライ—山下祐介准教授

白石氏は本書について、「<溜め>(余地・余裕・寛容さ)のない社会が、災害に対していかに脆弱か」をはじめ、いくつかキーワードを議論に投じた。

それを受ける形で平井氏は、山下氏の主張を次のように要約した。

「東北と東京、中央と周縁という動かし難い対立軸が、震災で露わになった。出発点は常に東京であり、利益は地方にも分配されるが、失敗はすべて地方に向けられる非対称性が存在している。原発の安全性に疑問を持つことすらなく、地方も東京も騙されてきた。地方にアンバランスな関係を押しつけるのは、持続可能なシステムではないことを東京も自覚するべきだ。これ以上の欲望の追求を諦めて、システムの拡大と複雑化を避ける、新たな社会づくりを目指すしかない。そのためには東北人と東京人が必要であり、震災によって、私たちは『その先』を目指す貴重な機会を与えられた」

平井氏は、小田原市で生まれ育った半生を振り返りつつ「自分は東京(首都圏)の<地方>にいた。地場産業が疲弊し、街はシャッター通りになった。東京も、郊外には壊れた古い街がたくさんあり、そこを立ち去れない人々が住んでいる。確かに、津軽のリンゴ農家や深浦町の漁師を見ると(暮らしの)壊れ方が故郷と似ているが、東京の郊外のように<壊れ切った>感じはない。ただ、佐井村あたりへ行くと、東京では考えられない、何も始まりようがない樹林が広がっている」と感慨を語り、「地方」という言葉の多層性・多義性に対する注意を喚起した。

その上で、(1)人々は本当に「騙されている」のか。例えば福島県の人々が原発を受け入れたことについて、「騙された」とくれば、地元の救いにはなるだろうが、受け入れた経緯でどんな幸せを考えていたか(2)「辺境からはじまる、新しい社会づくり」について、もう少しイメージを膨らませてほしいと問い返した。

山下氏は「自らも原発の安全性に<騙されて>きた」との認識を示し、全町民が広域避難に追い込まれている福島県富岡町の避難者の調査経緯を踏まえながら「被災は原発を受け入れた当事者の責任—という議論が出かかっているが、推進側が、安全神話とともに<刺客>を送って地元を騙した事実をきちんとみていく必要がある」と答えた。また、「新しい社会づくり」のイメージについて、自著「限界集落の真実」(ちくま新書)で提示した「人のつながり・交流」の重要性を強調した。

2人の視点は、早急な復興を目指す動きの中で、「溜めの消失」によってさまざまな可能性が切り捨てられつつ、幾多の地域経営上の決断がなされていることへの危惧で一致した。ただ、大津波で大きな被害を受けた被災地出身の参加者からは、被災地の現状を考慮しない議論であるとの批判も出た。

◇

質疑でも発言したが、筆者自身は「騙した」「騙された」という関係性自体が、果たして成立している/いたのかを疑問視している。そこにあったのは、いわば阿吽の呼吸の「思考停止」だったのではないか。一方は過疎や雇用の不在、他方は原発建設スケジュールという、ともに「時間」に追われ、当事者が「安全」について考えることを止めたとき、福島第一原発の建設が決まり、そして今回の事象への回路が開けたのではないか。あえて「騙す」という言葉を使うなら、住民と国・電力会社は、ともに自らを騙し、自らに騙されたのではないか。

また、「被災」「被災地」という語の用法について、もう少し慎重かつ繊細であってもよいのではないかと感じる。今回の震災は「被災地の数だけ被災の様相がある」と言っても過言ではない。いわば「被災地の周縁」にある津軽からは、実はその状況は意外に見晴らしが効く。この震災研究交流会に、大きな存在意義を感じる由縁の一つである(M)。

【連絡先】 弘前大学大学院地域社会研究科 檜根研究室(教員室2)

Tel 0172-39-3938(内線3938) Mail himaki at cc.hirosaki-u.ac.jp